

名古屋大学 農学国際教育協力研究センター ニュース

平成27年12月1日発行 通巻28号(年2回発行)

発行/名古屋大学 農学国際教育協力研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL 052-789-4225(受付) FAX 052-789-4222
<http://iccae.agr.nagoya-u.ac.jp/index.html>
e-mail:iccae@agr.nagoya-u.ac.jp

第4回JICA-JISNAS フォーラム開催のお知らせ

第4回JICA-JISNASフォーラム「教育・研究力の高度化に向けた人材育成を通じた大学の外交力(仮題)」が下記の日程で開催されます。これまで、日本の高等教育機関が有する知識と技術に基づく知的支援が途上国の学術振興に対して一定の貢献を果たしてきたことは間違いのないといえるでしょう。また、かつて若手人材育成事業等により日本の教育研究機関で学んだ留学生が、その後、母国において教育研究行政のトップとして機関の意思決定あるいは中央・地方政府の政策を担う立場となって活躍している事実を改めて注目すれば、大学は極めて重要な「外交力」を有していると理解できます。今回のフォーラムは、この大学の外交力を有効に機能させるべく、将来を見据え、組織的に取り組んでいくための方策を議論する場にできればと企画されたものです。詳細については、近日中にセンターホームページ等でご案内いたします。

開催日：2016年3月15日(火)

場 所：国際協力機構(JICA)市ヶ谷ビル 6F
JR中央線・総武線「市ヶ谷」徒歩10分
都営地下鉄新宿線「市ヶ谷」

A1番出口 徒歩10分
東京メトロ有楽町線・南北線「市ヶ谷」

6番出口 徒歩8分

時 間：13:30~17:30(終了後に交流会あり)

主 催：農学知的支援ネットワーク(JISNAS)
国際協力機構(JICA)農村開発部

共 催：国際農林水産業研究センター(JIRCAS)

後 援：名古屋大学農学国際教育協力研究センター

平成27年度JICA課題別研修 「アフリカ地域稲作振興のための の中核的農学研究者の育成」

本研修は、昨年で終了した第1フェーズに続く第2フェーズ3年間の1年目として、7月10日~8月12日、農学知的支援ネットワーク(JISNAS)会員である大学の協力を得て実施されました。サブサハラアフリカ諸国のうち10ヶ国より12名が来日し、コア研修として稲作に関わる基礎的な知識や技術、PCM手法、日本における稲作振興のための技術開発と政策の関係等、名古屋大学フィールド科学教育研究センター東郷フィールドにて圃場の見学、

稲作の機械化に関する講義と実習を行いました。また、愛知県新城市の四谷千枚田を見学し、我が国の伝統的な棚田に触れることもできました。その後、全国の7つの協力大学に移動し、

受入教員の指導を受けながら専門性を高めた上で、締めくくりにして研究を効果的に進めるためのリサーチプラン立案に関するワークショップとリサーチプラン発表会を開催し、JICA筑波所管の別のアフリカ稲作研修

も交え、協力大学の教員とともに活発な議論を展開しました。今後は、研修員と教員のネットワークのみならず、各国のCARD関係者も含めたコンソーシアムを構築し、研修員のフォローアップ、日本への留学や受入教員による現地指導、日本とアフリカの共同研究等も視野に入れた活動に発展させていきたいと考えています。

参加国：ブルンジ、コンゴ民主共和国、コートジボワール、エチオピア、ギニアビサウ、ナイジェリア、スーダン、タンザニア、ウガンダ、ザンビア

協力大学：岩手大学農学部、茨城大学農学、新潟大学農学部、岐阜大学応用生物科学科、京都大学大学院農学研究科、島根大学生物資源科学部、鹿児島大学農学部、三重大学大学院生物資源学研究科、三重大学国際交流センター、名古屋大学大学院生命農学研究科



稲作の機械化に関する実習の様子



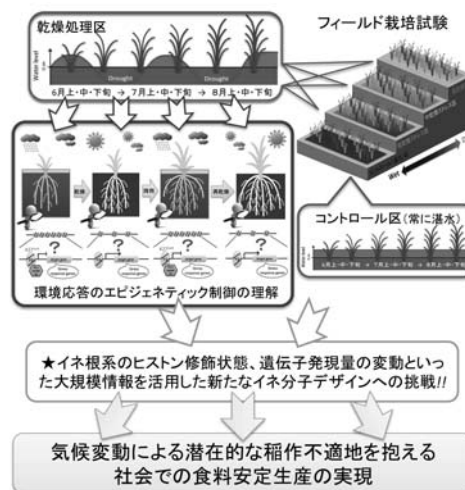
四谷千枚田訪問時の様子



PCM研修にて

JST戦略的創造研究推進事業「さきがけ」の新規採択

2015年度（第2期）のさきがけ「フィールドにおける植物の生命現象の制御に向けた次世代基盤技術の創出」研究領域に「土壌水分変動適応型エピジェネティック情報を捉えたイネの分子デザイン」が採択となり、本年12月1日よりスタートを切りました。本研究課題では、気候変動時代の食料安定確保を目標に、卓越した基礎科学の追求によるイネの次世代品種改良技術の開発を目指します。2011年6月に発行しました「ICCAE news No. 19」にて、学術誌「農学国際協力」の発刊にあたり、本誌は「農学における最先端研究をいかに国際的に展開させるか、またそれを世界的な問題の解決のためにどう用いていくかを考えます。これによって、最先端研究と国際的な課題の把握が同居しているような人材を育成することができれば、望外の喜びです。」と抱負が述べられています。しかしながら、同一人物の中にこの二つを“同居”させるのは至難の業です。そのため、「開発途上国における農学領域の諸問題の解決に貢献する」ことをミッションに掲げたICCAEの教員である私自身が、卓越した基礎科学からトップイノベーションの源を生み出す「さきがけ」事業を通して最先端農学研究者として成長することで、“同居”した人物像の一つの模範を示せるよう努力していきたいと考えています。（犬飼義明）



名古屋大学アジアン・サテライト・キャンパス:カンボジアキャンパス入学式

名古屋大学カンボジアサテライトキャンパスの第2回目の入学式が、10月8日(木)にプノンペン市内にあるカンボジア日本人材開発センター(CJCC)において行われ、名古屋大学から松尾総長、渡辺理事、磯田アジアサテライトキャンパス学院長、各研究科の関係教職員が出席し、農国センターからも山内と伊藤が出席しました。カンボジアキャンパスでは、農林水産省、司法省、公務員省、国立エイズ対策機構、民主的開発委員会から各1名の計5名を、第2期生として迎えました。ICCAEが協力講座となっている生命農学研究科に所属する学生は、農林水産省職員として王立農業大学の副学長を務めるTY Channa氏が第2期生として入学したことで計3名となりました。

入学式には、学生の勤務先を含むカンボジア国の6省庁の長官や副長官も出席し、盛大に入学を祝いました。また、同日の夕刻には、ヒマワリホテルにて名古屋大学同窓会が開催され、100名を超えるカンボジア人の名古屋大学卒業生が集い、新入生を祝うと同時に同窓生同士の結束を深めました。

入学式の翌日には、松尾総長をはじめとする名古屋大学関係者が王立農業大学(RUA)を訪問し、RUA学長よりICCAEとの共同研究から始まった名古屋大学との連携の歴史について説明を受けた後に、サテライトキャンパス事業の視察を行いました。生命農学研究科からは、乳牛生産を通じた各種実習と生乳生産を目指すプロジェクトの視察・説明がなされ、農国センターからはJICA草の根技術協力事業や科学研究費補助金にて実施している食品加工に関する事業について紹介しました。休憩時には、両事業より生乳を用いたアイスクリームやシャーベット、米蒸留酒、果実酒、フルーツ・野菜を用いたジュース等の試食会が行われ、活動の成果を肌で感じていただきました。初めてのカンボジア訪問となった松尾総長をはじめ、これまでご支援頂いてきた理事や各研究科の教職員の方々に、ICCAEが現地で積み重ねてきた人材育成を含む実践的研究の成果について広く知っていただくと同時に、様々な助言を頂く機会となりました。（伊藤香純）

退任挨拶

退任に当たって 浅沼修一

2005年4月から10年間、国際教育協力にかかわる様々なことに係ってきました。初めは、何をやるか自ら探し求める日々が続きましたが、あっという間に農国センターを自分たちで作って行こうというセンター長、教員や事務職員の熱い思いに飲込まれ、知らず知らずのうちに土日のない生活になっていきました。農水省の競争的資金にチャレンジするときは、素敵なアイデアをどうやって実行するか悩んでい



ましたが、一人でなくみんなでやればできると背中を押してくれたのが当時の竹谷センター長はじめ同僚の教員たちでした。それから5年間“日本のノウハウを日本人の手でアフリカへ”のスローガンを掲げ、海外で研究している日本人の元にアフリカの若い人材を招聘して研修を行う事業は、農国センターが国際的な認知を得ることに貢献できたと思っています。農国センターには、オープンフォーラムやオープンセミナーなど独自のユニークな活動がありますが、それらを通して新たな出会いや人とのつながりになっていきました。アセットとして次につなげて行きたいと思っています。農国センターが時代の波の中でおもねることなくそのユニークネスを活かした研究教育を続けていくことを期待しています。この10年間にご協力ご支援をいただいた学内外のみなさま、絶えずフレッシュな感覚で議論できた学生のみなさんにこの場を借りてお礼を申し上げます。

着任挨拶

江原 宏 協力ネットワーク開発研究領域 教授

2015年10月1日付で協力ネットワーク開発研究領域の教授に着任いたしました。これまで、栽培生理、熱帯農学の専門家として、貧栄養、塩害、酸性土壌、洪水といった厳しい環境条件に対する作物および資源植物の形態形成、生理反応に関する研究を行ってきました。東南アジアではタイなどの半島部、インドネシアなどの島嶼部、ミクロネシア、メラネシアのパプアニューギニア、バヌアツ、フィジー、ポリネシアのサモア、アフリカではタンザニア等をフィールドとして、国際共同研究や国際協力に携わってきました。近年は、農林水産技術会議地球規模課題国際研究ネットワーク事業による「食料安全保障強化に向けたサゴヤシ澱粉の持続生産と利活用に関する戦略的総合研究プログラム」、科研費による「大洋州を中心としたサゴ属ヤシ資源のインベントリー研究」、「アジアの洪水常襲地に適した持続的作物栽培体系の開発」、日本学術振興会や科学技術振興機構等の支援による若手研究者育成事業などに取り組んできました。これらの経験や人的なネットワークを生かし、本学の基本方針に沿って、農学領域の開発問題を実践的に解決する人材を育成するという当センターの設立理念に従い、自発性を重視し、高い専門性に裏付けられた実践的技術の研究と開発、それをベースとする教育、国際協力活動を推し進めたいと考えています。



略歴 1962年生れ。1985年日本大学農獣医学部卒業、1987年岡山大学大学院農学研究科修了、1990年同大学院自然科学研究科単位取得退学。1991年に学術博士（岡山大学）取得、三重大学生物資源学部助手に採用され、日本学術振興会特定国派遣研究者（英国王立キュー植物園、三重大学助教授、同大学院教授、学長補佐（国際交流担当）、副学長（国際担当）などを経て、2015年10月より現職。

ケニアSATREPS稲作研究プロジェクトの進捗状況

ケニアで2013年5月22日より実施している地球規模課題対応国際科学技術協力（SATREPS）「テーラーメイド育種と栽培技術開発のための稲作研究プロジェクト」では、ケニアの稲作安定化に向けた品種改良と栽培技術開発のための研究を現地で行うため、ケニア農畜産業研究機構ムエア支所の研究環境を整備し、研究技術のケニアへの移転と研究人材の育成を進めています。これまでの現地調査および栽培試験からは、ムエア灌漑地区では耐冷性が必須の形質であること、土壌へのCaやMgの集積によるK不足の問題があること、不十分な灌漑水を有効に使い生産性を向上するための節水栽培技術の確立が重要であること、同地区の潜在生産力は極めて高く、適切な水および肥培管理により、品種によっては10 t ha⁻¹以上の高収量を実現できることなどが分かってきました。さらに、現地のいもち病菌レースの病原性や土壌環境に応じた耐旱性関連根系形質とその能力発現に必要な施肥レベルなどについても解明が進んでいます。また、耐旱性、耐冷性、耐塩性、低肥沃土壌適応性、いもち病抵抗性、高収量性などに関わる量的形質遺伝子座（QTL:quantitative trait locus）を交配とDNAマーカー選抜などの技術を使って導入したケニア向けの育種材料の育成も概ね計画通りに進んでいます。今後は、これまでに整備したストレス耐性評価圃場を活用し、有望系統の選抜を進めるとともに、遺伝子型×栽培環境×栽培管理の相互作用の解析を通して、品種のストレス耐性や生産性に関する能力を十分に発揮させるための栽培技術の開発に取り組む予定です。（横原大悟）



ケニア農畜産業研究機構ムエア支所キログ農場における収穫作業の様子

離任挨拶

山口奈々恵 事務補佐員

約8年間勤務させていただき、退職することになりました。農国センターは非常に活発な職場で、採用以来忙しくも大変貴重な毎日を過ごさせていただきました。

在職中は多くの先生、研究員、学生さん、関係者の皆様方と交流させていただき、感謝しております。また引込み思案だった私が、明るく積極的な先生方や学生さんとの関わりを持たせて頂いたお陰で、国際交流や海外出張等にチャレンジし新しい自分を発見できました。これらは私にとってかけがえのない財産です。

農国センターの皆さんは活動的で、特に学生さんは目がキラキラしているのが印象的でした。お体に気をつけてご活躍いただくことを願っております。皆様大変ありがとうございました。



着任挨拶

河本善子 事務補佐員

6月よりセンターにて勤務しております。教員の皆様が各々プロジェクトを推進され、国内外に大きく貢献されると同時に留学生を含む大勢の学生さんを育てておられ、そのエネルギーなご活躍振りには、ただ驚くばかりです。現在も教えていただくことの方が多くお手数をお掛けしておりますが、一つ一つ覚えていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。



中塚道代 事務補佐員

10月1日に着任いたしました。着任から日が浅く、また初めて経験する仕事もあり、不慣れなことも多いため、日々、周りの職員の方々、先生方に支えていただきながら、業務を行っています。新しい経験を重ねることで、早く仕事に慣れ、今後は、微力ながら、みなさまのお役に立てるように、尽力したいと思っておりますので、ご指導のほど、よろしくお願いたします。

